

大学と地域連携のあり方に対する一考察

著者名：石井洋也（経済学部 4 年）

指導教員：長田進 教授

1. はじめに

厳しい地方財政、少子高齢化の進展などの地域課題が存在しておりことに対し、地域と大学が連携した事業について非常に強い関心が集まっている。本稿の目的は、これからの大学と地域連携のあり方にごどのような流れがあるか、傾向を見ていき、これからの大学と地域連携としてあるべき形としての一考察とする。

2. 大学を取り巻く環境の変化

大学を取り巻く環境の変化として大きく 4 つの変化について述べていく。一つ目は大学改革についてである。2004 年にこれまで国立大学であったのが、国立大学法人へと変わった。法人化されることによって大学は組織や予算面での自由度は増えたものの、大学自ら積極的に財源を獲得していかななくてはならなくなった。そのため、大学は学生に多く来てもらう必要があり、他の学校に比べてより特色を示す必要が出てきた。その時に注目を集めたのが地域への貢献であり、大学の生き残り戦略の 1 つとして扱われるようにもなった。第 2 に少子高齢化である。今は大学進学者数に影響は出ていないが、人口の減少がこのまま続くと、大学の入学者数が横ばいになり続けることはなく、学生数が減少していくこととなる。今後受験者数が減少し、入学者数に影響が出始めれば、大学が学生の獲得に必死になる。第 3 に 2013 年より大学 COC 事業が行われることとなった。この事業は地域再生・活性化を目的としており、その結果に応じて優れた COC 事業に採択された場合、活動支援が行われる。2015 年には大学 COC 事業は COC+ と取って代わることとなった。最後に大学の経営戦略である。交通網の変化により各大学は自分の大学の特色を打ち出すことで、地元、自分の大学に人を引き付けようと努力する。そのために産学官連携など

に力を入れ、地域貢献度ランキングで上位を目指そうとしている。地域貢献活動を通して社会活動を行い、就職の前の事前体験が出来るというところで魅力を打ち出していくことが学生の学校に対する関心に繋がる。こうして発達していく交通網に対しても抗い、むしろ利点としていく必要がある。

3. 大学による地域貢献・地域連携とは

地域貢献とは大学が地域社会の課題に対しての貢献や、学生の若い力の投入など様々な形で地域に対して貢献していくことであり、地域や学校の特色によって様々な形で貢献していく。大学と地域では互いの求めているものと提供しているものにミスマッチが起きている。しかし、どこの地域と大学でも共通の課題として挙げているのが「学生が街に出ていく必要がある」という考えがある。地域貢献を行うことで「社会人基礎力」は必要とされ、実践の場として磨かれることとなる。地域貢献を行うことは地域、学校、または学生のためともなる。

4. 地域貢献度ランキング

本稿の目的にあたり、日本経済新聞社と日経産業消費研究所が創刊している日経グローバルにおいて、特集している地域貢献度ランキングを用いている。現在までで10年分のデータが記録されており、過去の順位と比較を行うことが出来、順位を保ち続けることの出来ている大学があらゆる分野で地域貢献に対して力を入れていると評価しやすい。また、設問の変化より設問を見ることで現在、大学の地域貢献に求められていることがみえてくる。2006年度～2015年度の間にも一度でも上位20校に入ったことのある学校の表分布を地域貢献度ランキングのデータを基に独自に表を作成し、比較していく。この表分布を様々な基準で並び替え、この相関図から言えることについて大きく4つに分けて述べていく。1つ目は国公私大順に並び替えた場合である。国立大学は法人化に伴い、地域貢献に非常に力を入れており、総合的に順位が高い。公立大学は母数が少ないため、数校が入るだけでも検討しているが、公立大学の財源が地方自治体から出ているため、この指標では見えない成果があるのかもしれない。2つ目は上位層の固定化が見える。上位校では地域連携が強いことをブランド価値として維持しようと活動し続けていることが考えられる。3つ目に学校の専門についてである。この調査が行われた当初は専門性の強い看護・薬科・工業・畜産大学と専門的な学校が多くランキング上位に入ってきていたが、現在は規模の大きめな首都圏を除いた地方にある主要総合大学がこのランキングに入る傾向がある。総合大学が地域貢献事業に力を入れると、規模の大きさから専門大学はランキングでは勝てなくなる。4つ目には地方別の傾向であ

る。地方別にみると、東北では東日本大震災の影響が、関西では国公立大学が全体的に地域貢献に入れている。また、四国、長野県では大学同士が連携を取り、地域貢献を行っていることが伺える。各大学のランキングを見ていて、今回扱っている日系グローバルの地域貢献度ランキングにおいて、設問事項の大幅な変更がある中でも上位を維持できるのはこの分野での真の強さがあるのかもしれない。しかし、海外向けの傾向が強くなっているが、原点に返り地域貢献・地域連携と考えた時、地域所属している大学が、その地域や周辺地域に対してどのような存在であるかが重要になってくる。

5. 長野県 3 大学の地域貢献の強さ

長野県の 4 年連続 1 位を獲得した信州大学をはじめ、松本大学、長野大学は常に地域貢献度ランキングで上位を保ち続けている。長野県の中で 3 校も上位に入り続けることが出来ている背景には過疎化に象徴される地方の衰退、東京が近いために起きる学生の流出への危機感の強さ、また 3 大学が同一の問題に対して互いに切磋琢磨をしながら臨んでいるところにある。その上で地域貢献に対して常に次へと新しい事業、時代の傾向をとらえている。1 つの大学のみならず、近い地域や大学同士も連携して地域連携に取り組んでいく姿勢が大学と地域を盛り上げていくと考えられる。

6. 結論

大学と地域連携を目指す形として、どのような形が理想的なのか、答えは数多く考えられるが要素はいくつか挙げられた。その中でも重要に感じたのは大学が単独ではなく、周辺地域、大学を巻き込んだ形で地域連携を行っていくこと、そして究極的には信州大学の学長が挙げたように地域と一緒に何かをやるという立場になることである。互いに何かしていこうといった良い連携が生まれるべきである。この形になるだけでも、各地方の中で地域ごとに盛り上がりが増し、大学のみならず、地域にも魅力が生まれ、地方全体の活性化につながるのではないだろうか。